

錢鍾書『圉城』解読 2

— 恋愛と結婚に見る「近代」神話 —

杉 村 安幾子

The Interpretation of Qian Zhongshu's *Weicheng* 2 : The Modern Myth of Romance and Marriage in China

SUGIMURA, Akiko

金沢大学外国語教育研究センター
言語文化論叢 第14号
2010年3月刊

Foreign Language Institute
Kanazawa University
Studies of Language and Culture
Volume 14
March 2010

錢鍾書『圉城』解説 2

——恋愛と結婚に見る「近代」神話

杉 村 安幾子

1. 序 —— 「ボヴァリー夫人は私である」

錢鍾書は 1979 年 4 月下旬、中国社会科学院代表団の一員として訪米している。主要な訪問先はブルッキングス研究所、ジョンズ・ホプキンス大学、コロンビア大学、イエール大学、ハーヴァード大学、シカゴ大学、スタンフォード大学等であったが、訪問先の一つであったカリフォルニア大学バークレー校における座談会¹にて、錢鍾書は中国文学に関する様々な質問を受けている。自身の長篇小説『圉城』（1947）について問われた際には、「決して自伝的作品ではない」と述べ、次のように続けた。

『圉城』が出版されてから、多くの女性読者が手紙を寄越し、根掘り葉掘り尋ねてきました。私自身が作品中の男性主人公ではないのかとか、結婚生活が意にかなうものではないのか等々。実のところ私は happily married man（幸せな結婚をした男、愛妻家）なのですよ。²

錢鍾書自身の言を俟つまでもなく、錢鍾書と妻楊絳は中国現代文壇における「鵝鰾（鴛鴦夫婦）」として有名である。その錢鍾書が読者から「結婚生活が意にかなうものではないのか」などという質問をされる所以は、『圉城』において主人公方鴻漸が恋愛結婚をしたものの、最終的にその結婚が破綻する様が描かれていることにある。座談会の席上、錢鍾書は更に強調する。

私が『圜城』について受け取ってきた手紙は三つに分類されます。一つは『圜城』は自伝かどうか。二つ目はモデルの有無についての追及。モデルがいるとしたら、どういった人達か。三つ目は『圜城』が私自身の結婚生活の写実ではないのかと尋ねるもの。これらの疑問に私は一つ一つ否認したいと思います！³

錢鍾書の度重なる強調は、裏を返せばそれまで錢鍾書が主人公方鴻漸と同一視されたり、或いは『圜城』に描かれた結婚の破綻が自身の実生活に基づくものと見なされたりしてきたことを示しているだろう。筆者は前稿⁴において、主人公方鴻漸は江南無錫の士大夫階層の名家出身である点や、北京の大学を卒業後ヨーロッパ留学の機会を得たという経歴に、作者錢鍾書自身の経歴がかなり反映されている点については認めざるを得ないものの、優秀さは比較するべくもなく、単純に錢鍾書イコール方鴻漸と見なせないことを指摘したが、又一方で共通点の多さは読者に、方鴻漸に錢鍾書を投影してしまう誘惑をも喚起してしまう。実際、錢鍾書の妻楊絳までもが「方鴻漸と錢鍾書はどちらも無錫出身であるというだけで、彼ら二人の経歴は全く異なるものだ」⁵と明言せねばならないほど、その誘惑は強力なものであった。

しかし、その楊絳は期せずして次のように言う。

フランス 19 世紀の小説『ボヴァリー夫人』の作者フローベールは、かつて“ボヴァリー夫人は私だ”と言ったそうだ。それならば、錢鍾書も同じように“方鴻漸は私だ”と言っても良さそうなものだが、そうすると他の多くの登場人物達も錢鍾書であると言え、方鴻漸一人にとどまらないことになる。⁶

楊絳の「他の多くの登場人物達も錢鍾書である」という一文が、方鴻漸が錢鍾書でないのは、他の登場人物達が錢鍾書でないのと同様である、という意味において用いられていることは明らかであるが、一方でこの文はある真実を突いてもいないだろうか。どれほど文に巧みな作家であったとしても、未知の事物を書けるはずはなく、それは換言すれば書かれたことは全て作家自身の眼を通したこと、作家の内からの声であるということで、そう考えれば作品に作家

自身が表れないはずがない。極論を恐れずに言えば、作品は作家自身なのである。

「圜城」というタイトルは、作中、結婚に関して交わされた「金の鳥籠のように、籠の外の鳥は中で暮らしたいし、籠の中の鳥は飛んで出たい」「城の外の人は攻め入りたいし、城の中の人は逃げ出したい」という会話に基づく。そこから「圜城」には人生全般、更には近代中国が直面していた壁をも象徴する含意が籠められたことは前稿において論証したが、『結婚狂詩曲』という邦題が示すように、『圜城』において描かれる主人公方鴻漸の結婚生活の破綻はなるほど物語全般に占める比重が大きい。また、作中に描かれた結婚やその後の家庭生活の描写が、前述のように作者錢鍾書自身の結婚生活の反映と受けとめられる向きが多くあることも事実である。本稿では上記のような状況を受け、恋愛や結婚をキーワードとして、敢えて『圜城』の中から錢鍾書自身を析出してみたい。このような試みが作者の意に反するものであることは承知の上だが、錢鍾書が自身をも縦糸の一本とし、時代的社会的な位相を横糸として『圜城』を織り上げていることを明らかにする作業が、作品の思想的支柱を捉えることにつながると思われるからである。本稿の主眼も前稿と同様、『圜城』が「圜城」のモチーフを通して、当時の中国の社会状況や知識人達の世界観を鋭く抉り出していることの検証にある。

2. 民国期の恋愛——男女共学と予示された恋愛の破局

張競『近代中国と「恋愛」の発見』⁸によれば、中国文学において「恋愛」という語は19世紀後半から20世紀にかけて西欧文学の用語の翻訳として紹介された。言うなれば、中国にはそれまで「恋愛」という概念がなかったということになる。無論、古代中国にも『詩経』などのように男女の恋情を表現したテキストはあったし、明代の才子佳人小説にも男女の情愛は描かれた。しかし、それらは西欧文学に描かれた「西欧的恋愛」とは大きく異なるものであった。その背景としては、西欧と中国の文化社会習慣の大きな相違を指摘できるだろう。例えば、西欧において未婚の男女は気軽に会い、言葉を交わす。このこと

一つをとっても、それを知った 19 世紀末から 20 世紀初頭における中国人は驚愕であっただろう。当時の中国の道德規範に則れば、そのようなことはあり得べからざる不道德であつたからだ。未婚の男女の自由恋愛、そしてそれに基づく結婚という形態も、結婚とは親の取り決めによって行なうものであつた中国においては、「野合」とすら見なされた⁹。尤も、「西欧的恋愛」は結婚の枠外において描かれ、恋愛の成就すらなされない場合も多く¹⁰、そのため中国においては当初、西欧的恋愛の価値観は自由恋愛・自由意志による結婚相手の選択という単純化された図式として受容されたのであつた。

「恋愛」そのものについてだけでなく、「恋愛」の表現方式に関しても当時の中国と西欧の径庭は甚だしい。1899 年、林紓が王寿昌の口述訳からデュマ・フィスの『椿姫』を文言に翻訳し、『巴黎茶花女遺事』と題して刊行した。周知の通り、この作品は確実にその後の中国文学の進む方向を示すことになる。

『巴黎茶花女遺事』が当時の中国文壇に与えた衝撃の大きさは、後に銭鍾書の父親である銭基博が「ある一時代を風靡し、中国文学においてある道を開拓した」¹¹と評したことに示されているだろう。『椿姫』の物語自体は高級娼婦の純愛を描いており、才子佳人小説の伝統のある中国においては珍しいものではない。この点において、当時の中国には『巴黎茶花女遺事』を受け入れる土壌はあったと張競は指摘する¹²。しかし、中国人を驚かせたのは交際における男女の行動様式や、男性による女性優先の慣習、それらの上に築かれる「西欧的恋愛」の形であつた。その顕著な例が『巴黎茶花女遺事』に度々描かれる貴公子アルマンのマルグリットへの愛情の表明である。マルグリットに対する愛情を率直に言葉にするアルマンのありようは、口頭での告白などという風習のなかった当時の中国人読者に新鮮な驚きを与えたのである。「恋愛」とはいかなるものか、そして「恋愛」はどのように表現されるものか。『巴黎茶花女遺事』がもたらしたものは「西欧的恋愛」の習慣・技法のみならず、文学における表現の可能性でもあつた。

西欧を通じて「恋愛」を移入したのは中国だけではない。日本も江戸文芸に描かれた遊女の交情と「西欧的恋愛」との明らかな違いを受けて、「情」や「恋」といった既存の語ではなく、新たに「恋愛」という語を“love”に当てたので

ある。厨川白村は「日本語には英語の『ラブ』に相当する言葉が全くない」¹³と述べ、徳川時代の漢学者の偏った両性観を痛罵した。男性を優位に置き、女性蔑視の風潮を有する儒教道徳が、知識人社会の底流にあったという点では、中国と軌を一にしている。「恋愛」をどのように定義するかにも議論の余地が残されており、それと関連して「恋愛」が明治期に西欧を通じて輸入されたという言説に異論を唱える向きもあるが¹⁴、少なくとも、貴族ではない男女の交際や、浄瑠璃ものなどに見られるような「心中を前提とした悲恋」ではない恋愛が文学作品に描かれるようになったのは、やはり明治以降と見て間違いはないだろう。いずれにしても、未婚の男女が気軽に言葉を交わし、交際し、自由に結婚相手を選べるなどという土壌がなかったという点においては、日本も中国も同様であった。斯様に 19 世紀末の西洋と東洋とでは、文化的体質が異なっていたのである。

さて、『圀城』は 1937 年夏、主人公方鴻漸が留学先であったヨーロッパから帰国する船上を舞台として幕を開ける。方鴻漸はヨーロッパ滞在の四年間に、大学をロンドン・パリ・ベルリンと三つも替え、そのどこでもだらしない生活を送り、結果として見聞を広めただけで帰国の途に着く。この方鴻漸については「現在 27 歳で、とうに婚約はしているが、恋愛の訓練はしていない。

〔一〕」¹⁵と紹介される。ここでの「恋愛訓練」とは女性との付き合いを意味しているだろう。彼は男女共学の大学を卒業しているが、女性と交際する機会は何もなかった。大学入学時の様子は「北平の大学に進学し、そこで初めて男女共学を体験した。人様の恋愛沙汰を目にするばかりで、羨ましくて仕方がなかった。〔二〕」と描かれている。

中国近代教育史上初の「大学」となったのは、天津の北洋大学堂（後の天津大学）であり、創立は 1895 年。1905 年の科学廃止に伴う学校教育制度の確立や教育振興策などに関しては前稿でも紹介したため、ここでは詳しい言及は避けるが、一点指摘すべきは 1920 年に北京大学に 9 名の女子学生が聴講生として入学したことである。この 9 名が中国の国立大学では初の女子学生となる¹⁶が、その二年後の 1922 年には学制が改められ、全国的高等教育機関（教会経営の学校を除く）に学ぶ女子学生の数に 665 名となる。この 665 という数は、

学生総数の 2.1%を占めるばかりの寥々たるものではあるが、教育の近代化に中国よりも早く着手した日本の大学が、法的に男女共学を取り入れたのが第二次世界大戦後であることを考えれば、中国の大学の共学化の早さは注目に値しよう。

1927 年、南京国民政府樹立後、中国の女子高等教育は一定程度の速度で発展を遂げていく。1928 年から翌年にかけての一年間、大学に在籍した女子学生数は 1,485 人に達し、更に 1936 年には 6,375 人に伸び、学生総数の 15.2%を占めるまでになった。その一方で中学校の共学化が遅れたり、教育を受ける機会すら得られなかった貧困層の問題などもあったことを考えると、当時女性が大学に学ぶということがどれほど恵まれていたかを想像するのは極めて容易であらう。

方鴻漸が大学に在学していたのは『围城』の冒頭の 1937 年から遡って計算すると、大体 1931 年から 1934 年になる。丁度大学に学ぶ女子学生が増加しつつある頃であったとは言え、やはり圧倒的多数は男子学生であった。少数の女子学生を巡って多くの恋の鞘当が演じられていたのであろう。いずれにしても方鴻漸は、あぶれた大多数の一人に過ぎなかったというわけである。女友達の一人も出来ず、彼はショーペンハウエルを片手に「この世にどこに恋愛なんてあるんだい？元々、生殖衝動なのさ。〔一〕」などと賢しげにうそぶくばかりであった。大学時代の方鴻漸については、同級生の蘇文紈に次のように形容されている。

大学で同級だった頃、この人ったらいつも遠くから私達を見て、顔を真っ赤にしていたのよ。そばに寄れば寄るほど赤くなって、見てる私達まで暑くなってたまらないほど。私達、いつも蔭で彼のことを「寒暖計」って呼んでたの。だって、彼の顔の色は、温度が上がったり下がったりで、自分と女子学生との距離の遠近を表してたんだもの。ほんと可笑しかったわ！〔三〕

蘇文紈のセリフは、方鴻漸が強がって見せても全く女性に慣れていなかったことを表しているだろう。こうした方鴻漸の大学生活には、作者錢鍾書の大学

生活が無論反映されているだろう。錢鍾書は 1929 年に北京の清華大学文学院外国語文系（外国語文学科）に入学しており、この年の清華大学入学者は、男子が 174 人、女子が 18 人であった¹⁷。

大学時代は女友達の出来なかった方鴻漸も船の上では、同乗の二人の女性と親しくなる。一人は前述の蘇文紈、リヨンの大学でフランス文学の博士号を取得した才女である。今一人はロンドンで医学を修めた、ポルトガル人の血を引く鮑小姐。方鴻漸は長い船旅に飽きた鮑小姐の誘惑を受け関係を結ぶが、旅が終わると相手にされなくなる。方鴻漸は少なからず自尊心を傷付けられるが、彼の方も言わば学生時代にうそぶいていた「どこに恋愛なんてあるんだい？元々、生殖衝動なのさ」を実践したに過ぎず、鮑小姐のことはすぐ忘れてしまう。一方、蘇文紈は大学時代は相手にしなかった方鴻漸に秋波を送り始める。彼女は学生時代は自分の値をあまりに高く設定し過ぎていたため、男性とは交際せずにいたのだが、博士号を取り、二十代も終わりにさしかかると今度は誰にも相手にされず、孤独感・疎外感を味わっており、同船した方鴻漸の人柄も金回りも悪くないのを見て、彼に近付こうと決めたのである。ところが、方鴻漸は蘇文紈の従妹（原文：表妹。中国語の“表”は父母の姉妹の子女など同姓でないといく関係を表す。杉村注）の唐曉芙に一目惚れ。化粧気はないものの、容貌秀で、可愛らしい笑窪を持つ唐曉芙も、方鴻漸から受けた印象は悪いものではなかった。二人は他愛のない内容の手紙のやり取りをしたり、デートをしたりと親交を深めていくが、この関係は最終的に、方鴻漸に振られ腹を立てた蘇文紈の邪魔立てによって破局を迎える。

尤も、唐曉芙は方鴻漸を振りはするが、自身も深く傷付いている。方鴻漸からの手紙を全て当人に送り返し、彼からも自分の手紙が返送されて来るが、箱を開けて自分の手紙を確認してしまえば方鴻漸との関係が決定的に終わりになると恐れ、逡巡した後、ようやく箱の中を確認する。

唐小姐の心の内に切なさが溢れた。箱の底にもう一枚紙があるのに気付いた。自宅の住所と電話番号が書かれている。そう言えばこれは彼と初めて食事をした時に、彼の本の後ろの空きページに自分が書いたものだ。彼はそれを切り取って宝物のようにしまっ

ていたのだ。(中略)方鴻漸なんて忘れてしまえばそれっきりだ。しかし、心が彼を忘れられない。まるで歯を抜いてしまった後、歯茎に空いた穴が痛んでいるかのよう。いや、植木鉢に植えた小さな木を根こそぎ抜き取ってしまうには、植木鉢をも粉々に割らねばならないかのようだ。〔三〕

唐曉芙のこのような心情を方鴻漸は知らない。こうして見れば、方鴻漸と唐曉芙は相愛であったと言えるのであるが、方鴻漸はその後ずっと彼に纏わり離れないことになる「圉城」の境涯に、既に陥っていたのであった。男女共学といった西歐式の習慣や生活様式、思考方式が中国に移入され、中国の若者の間でも男女交際が見られるようになったのは見てきた通りである。方鴻漸も唐曉芙と文通をしたり、デートをしているところからもそうした文化の変容を見て取れるだろう。しかしながら、様式や型が西歐式に変わっても、男女の心の機微やすれ違いなどはいかんともし難い。方鴻漸ら当時の高等教育を受けた若者の中に、「西歐の衝撃」以降、旧より新が良く、中国文化よりも西歐文化が優れているという価値観があったとしても、当然のことながら西歐文化が全てを良い方へ持って行ける訳ではない。西歐文学において「西歐的恋愛」が恋愛の成就を描かないという前提の上では、方鴻漸と唐曉芙の恋愛の破局はある意味予示されていたとも言えないだろうか。

ところで、「モダン文明社会の稀少動物——正真正銘の女の子〔三〕」と形容される唐曉芙について、錢鍾書の妻楊絳は「彼女は明らかに作者の偏愛する人物であって、作者は彼女を方鴻漸に嫁がせたくなかったのだ。」¹⁸と述べる。また、カリフォルニア大学バークレー校における座談会の席上でも錢鍾書は「『圉城』のどの登場人物も皆あなたに嘲笑・諷刺されているのに、ただ一人唐小姐だけは例外ですね。」と指摘され、「ではあなたはこう仰りたいのですね、唐曉芙は私の dream girl (理想的な恋人) である、と？」と慌てたように返答し、出席者の笑いを誘っている¹⁹。『圉城』の中で唐曉芙だけが作者の諷刺の矛先から逸れているという指摘は、実際その通りであり、錢鍾書が「『圉城』は自伝的作品ではない、方鴻漸は自分ではない」と繰り返し強調するのは、この点に起因するのではないかと考えられもする。と言うのは、唐曉芙には錢

鍾書の妻楊絳が投影されているからである。

唐曉芙と楊絳の共通点は、第一にその経歴と家族的背景に見出せる。唐曉芙は弁護士の父親を持つ政治系（政治学科）の大学生であるが、楊絳も父楊蔭杭は弁護士であったし、東呉大学政治系の卒業である。また、方鴻漸・蘇文纨が卒業し、唐曉芙が在学している大学は「北平の大学〔一〕」「戦局により内地に移転〔三〕」と紹介され、方鴻漸の唐曉芙宛の手紙で「昆明に復学するつもりならば〔三〕」などと書かれているところから、北京・清華・南開の三大学が戦火を避けるために湖南省長沙を経て雲南省昆明に移転し、合同で1938年に創立した国立西南聯合大学であると特定できるが、前身の一つである清華大学は錢鍾書の母校であるだけでなく、楊絳も大学院に通っている。第二に外見的特徴を挙げる。楊絳が学生時代に化粧をしなかったという点²⁰も、唐曉芙の外見描写「髪にはパーマをかけておらず、眉毛も抜いて整えていない、口紅も塗っていない〔三〕」に通じる。

第三として次のようなエピソードも確認しておこう。楊絳は1932年、蘇州から北京に出、清華大学の聴講生になる手続きをしている。楊絳の北京への旅に同行した東呉大学の同級生は5人おり、その中に孫令衡という男子学生がいた。楊絳が北京で、孫令衡に従兄（原文：表兄）だと紹介されたのが錢鍾書であった。方鴻漸が大学の同級生であった蘇文纨に、唐曉芙を従妹であると紹介されたのと同じ状況であると言える。このように、唐曉芙に妻楊絳を投影した以上、彼女に手ひどく振られる主人公方鴻漸のモデルが“happily married man”を自任する自身であるとは、錢鍾書は認めないであろう。

3. 「文明結婚」と働く既婚女性の憂鬱——「近代」の陥穽

中国において「男女が結婚するには双方が同意しなければならない、いずれか一方、または第三者が強制を加えることは許さない」（「中華ソヴィエト共和国婚姻条例」第二章第四条）²¹という婚姻条例が制定されたのは1931年12月のことである。この婚姻条例が、中国共産党による従来婚姻制度の変革を目指した初めての試みであった。

この婚姻条例の第一条には「男女の婚姻を確立するには、自由を以て原則とし、一切の請負・強迫・売買による婚姻制度を廃し、童養媳を禁止する」²²とあり、男女の婚姻の自由を強調したものになっているが、翻ってみれば従来の婚姻が「請負・強迫・売買」によるものであったことを示しているだろう。事実、旧中国において婚姻の目的は子孫を残すことに主眼があり、個人の問題ではなく、家の問題として親が取り仕切る（包辦婚。「包辦」は前述の「請負」に当たる。杉村注）のが常であった²³。婚姻の決定権は家長にあり、子女は「父母の命、媒酌の言」に従わねばならなかったのである。しかし、前述の婚姻条例の制定以前の 1920 年代には既に、五四新文化運動の洗礼を受けた青年の中に、親の取り決めた婚姻に抗い、自ら相手を選び結婚するという者も出始めている。

『圉城』に見られる二つの結婚についてここで見ていこう。まず最初に描かれるのは、方鴻漸に秋波を送っていた蘇文紈である。蘇文紈は方鴻漸に振られると、求婚してきた英国ケンブリッジ大学帰りの詩人曹元朗とすぐ婚約する。

下の弟の妻が方鴻漸に新聞の公示欄を指して見せた。蘇鴻業・曹元真の名が兩人連名で載っており、読者に蘇の娘と曹の弟が本日婚約する旨を知らせるものだった。鴻漸は驚きのあまり我慢できずに「ええっ!」と声を上げてしまった。（中略）蘇小姐が曹元朗に嫁ぐとは、女ってのは馬鹿になると本当に底なしに馬鹿だな!〔四〕

興味深いのは、蘇文紈と曹元朗との結婚が当人同士の意思に拠るものであるにも関わらず、新聞の婚約公示が蘇文紈の父親と曹元朗の兄の名で出されていることである。新聞紙上の婚約告示は 1920 年代後半から行なわれており²⁴、30 年代初頭には結婚相手募集の広告まで出ていた²⁵ほどであるから、『圉城』が背景としていた 1937・38 年にはおそらく既に珍しいものではなくなっていたであろうが、その告示が当人同士ではなく、父親ないしは兄という家長によってなされている点に、現在の日本の結婚披露宴招待状にも残る、結婚と家との関わり方の強さがうかがわれる。その一方で結婚式を挙げる日に関しては、フランス帰りの蘇文紈とイギリス帰りの曹元朗は「全くもって西洋かぶれで、旧式

結婚の黄道吉日選びに反対し、西洋式に日にち選びをすると主張〔五〕」したのである。結果、九月上旬に彼らの婚礼は行なわれた。蘇文紉の幼馴染で、彼女を好いていた趙辛楣は、方鴻漸に次のように説明する。

生憎、結婚式当日の水曜日は残暑の時季でね、すっごく暑かったんだ。僕は結婚式に向う道すがらこう思ったよ。これ幸い、今日の新郎は僕じゃない、とね。式場には冷房があったんだけど、曹元朗は黒いラシャの礼服を着て忙しくしてたから、顔中汗だくさ。白いカラーの襟元が汗のせいで黄色っぽくグニャグニャになってたよ。僕は、彼のあの太った体が全部解けて、汗になっちゃうんじゃないかって心配になったよ。ほら、蠟燭が融けて油だまりになるみたいにさ。（中略）結婚式の最中は、新郎新婦二人とも泣くも笑いもできないって顔でさ、まるで祝い事をしてるんじゃないみたいで、（中略）公共の場に貼られた「スリにご用心」のポスターにあるスリ常習犯の写真のような表情だったよ。〔五〕

この臨場感溢れる描写は、作者錢鍾書自身の体験に基づいている。妻楊絳の記述を見てみよう。

結婚式で黒い礼服を着、白い硬いカラーの襟元を汗で黄色くグニャグニャにした新郎というのは、他でもない錢鍾書自身である。私達の結婚式を行なった黄道吉日は、一年のうちで最も暑い日だったのだ。私達の結婚写真を見ると、新郎新婦、介添えの女性、花籠を持った少女、ベールを持つ少年、誰もが皆まるで警察に捕まったばかりのスリのように写っている。²⁶

錢鍾書と楊絳の結婚式は1935年7月13日、当時蘇州にあった楊絳の実家において行なわれている。「礼服」や「ベール」とあるところからもわかるように、結婚式は西欧の方式に則ったものであった。引用にある花籠やベールを持つ子供以外に、結婚行進曲を演奏する楽隊もいたようで、挙式後は写真撮影をし、大々的な披露宴が持たれた。こうした結婚式は当時、「文明結婚」と呼ばれた。

一般的な「文明結婚」について簡単に紹介すれば、文明結婚方式の婚礼にお

いて、新郎新婦は洋装で結婚誓約書を読み上げ、音楽演奏をバックに賓客から祝辞を受けたりする。親戚友人に結婚立会い人になってもらい、式後は通常披露宴が行なわれた。又、多くが蘇文紉と曹元朗のように、婚約・結婚の際に新聞紙上で公示を行なった。こうした文明結婚の方式は、文化的にも経済的にもその他の地方より発展を見せていた江蘇・浙江で特に流行していたという。²⁷

更に錢鍾書と楊絳は同日、無錫の錢鍾書の家に移動。そこでは完全に伝統的な中国式婚礼の場が設けられており、錢鍾書と楊絳は錢家の両親や祖霊に叩頭させられる。一日のうちに西欧式と旧来の中国式と、二通りの結婚式を行なったのであった²⁸。新婚の錢楊夫妻は式から一ヵ月後の8月13日、上海から留学先であるイギリス行きの船に乗る。1933年に既に婚約はしていたものの、35年4月に錢鍾書が第三回中英庚款公費留学試験に一番の成績で合格、イギリス留学が決まったゆえの慌しい結婚であった。

一旦『困城』に立ち返ることにする。蘇文紉曹元朗夫妻の結婚後は、蘇文紉は化粧品等の闇物資のブローカーになり、曹元朗は重慶で物資や食糧を管理する政府機関勤務となる。その事実に対する方鴻漸らの反応とそれが意味するものについては、前稿において詳述したのでここでは措くが、中国が戦渦に巻き込まれていく中で、彼ら夫婦が物資を扱う仕事に就いているお蔭で、生活上の問題は何らなく過ごしているらしいことは触れておこう。

次は主人公方鴻漸の結婚である。方鴻漸の結婚も自ら相手を選ぶという点において、自由恋愛に基づく新式の結婚をしたと言える。方鴻漸は唐曉芙に振られた後、上海にしばらくたったために国立三閩大学の教授招聘の件を受け、湖南省平成へと赴く。旅の同行者には三閩大学で同僚になる予定の趙辛楣、李梅亭、顧爾謙、孫柔嘉の四人がいた。孫柔嘉は地味な身なりの女性で、大学を卒業したばかりであった。方鴻漸は湖南への旅の途上や三閩大学着任後、李梅亭や顧爾謙の卑俗な人となり、学長・同僚達の醜い嫉妬や低劣な足の引っ張り合いを目撃する中で、人間関係を疎ましく思うようになり、自身の仕事に関しても「困城」の含意を強く感じていく。他方孫柔嘉に対しては、好意とも同情ともつかない気持ちを寄せ、ある時弾みとも言える勢いで婚約を決めることになる。方鴻漸と孫柔嘉は同僚を招いての婚約披露パーティーを経て、香港で式を

挙げる。結婚するに際しての慌しさは「結婚指輪を作り、服を一揃い新調し、結婚登記の手続きを進め、写真館で貸衣装の礼服姿の写真を撮り、客を招待〔八〕」と描写される。親兄弟は列席せず、通知で「結婚した」と知らせるだけの、文明結婚より簡便な方法であった。二人は香港から故郷に戻るとそれぞれの実家に挨拶に行き、上海に新居を構え、それぞれ働き始める。

方鴻漸の結婚に関しては、結婚後に錢鍾書楊絳夫妻の実体験が反映されている。前稿でも軽く触れたが、結婚後に孫柔嘉が働くことについて方鴻漸の両親が口を出す下りを見てみよう。前者は方鴻漸の父親によって孫柔嘉に直接向けられたもの、後者は方鴻漸の母親が孫柔嘉の留守中に息子に言い聞かせているものである。

「あなたに忠告しておきたいんだが。仕事をするのは勿論構わない。しかし、夫婦が二人とも外で仕事をするのは、“家に主なければ、箒が逆さまに立つ”と言いましてな、しっちゃんめっちゃかになって、家庭は有名無実化してしまう。わしも頑固者という訳じゃないんだが、やはり女の責任は家事だと思う。」〔九〕

「家にはね、女主人がいなければ絶対駄目なのよ。私が孫柔嘉に仕事を辞めるように言いましょう。あの子が一ヶ月に一体どれだけ稼げるって言うの！家の面倒を見ていれば、そんなはした金、生活費から全部浮かせられるわよ。」〔九〕

1938年、錢鍾書楊絳夫妻は留学から帰国。錢鍾書は教授として西南聯合大学に赴任するために単身で雲南省昆明へ、楊絳は娘を連れて上海の錢家で暮らし始める。ほどなくして楊絳は母校振華女子学校の校長王季玉に頼まれ、振華女子学校上海分校の校長を引き受けることになる。こうれに対し、舅である錢鍾書の父親錢基博は同意せず、「どんな仕事をすると言うんだ？やはり家で家事を学びなさい。」「こんな時期に何が校長だ！」と言った。更にこの錢基博の態度には、楊絳の父親楊蔭杭が「錢家も贅沢なもんだな。私が全心血を注いで育て上げた娘をあちらさんに嫁がせたら、給料の要らない女中になっているんだから！」と不快感を示したという²⁹。女性は結婚後、仕事をするよりも家で家

事をするべしという考えは、中国に限らず今尚残存している。方鴻漸の両親のセリフに示される考え方は、当時十分に支配的であっただろう。逆に楊蔭杭の考えの方が当時としては特殊であったと言える。尚、付言すれば、楊蔭杭は楊絳の結婚式の際、娘が錢家の両親や祖霊に叩頭する件に関しても嫌な顔をしたほどに開明的な思想の持ち主であった。楊絳の優秀さ、様々な方面における能力の高さ³⁰を誰よりも知っていた錢鍾書は、親世代の旧式な考えを『围城』において批判的に描き出したのである。

五四新文化運動以降、伝統的家父長制や旧式の婚姻のあり方は徹底的に批判され、文学作品においても不幸な事件やエピソードを生むものとして描かれてきた³¹。前稿で既に述べたように、旧い価値・旧い人間観への批判や反省が近代化の過程であったことを考えれば、それは当然の帰結でもある。また、近代化は言わば西欧的価値観の受容を条件としていたため、西欧留学帰りの知識人達を始めとして中国社会は西欧的な様式を積極的に取り入れるようになった。しかし『围城』最終章において、方鴻漸と孫柔嘉の二人は次第にすれ違っていき、繕う術もなく溝は深まり、最終的に結婚生活は破綻する。自由恋愛を経、近代的・西欧的な様式を取り入れた結婚式を挙げても、行き着く先は幸せなものとは限らないことを『围城』の感傷的で喪失感を漂わせたラストシーンは告げている。

このようにして、楊絳が『围城』の主たるテーマとして語った「城に囲まれている人は逃げ出したい。城の外の人には中に飛び込んで行きたい。結婚にしても、職業にしても、人生の願望は大抵このようなもの」³²という「围城」の境地は、最後に方鴻漸の結婚に及んだのである。

4. 結び——再び中国「近代」がぶつかった壁について

『围城』は発表直後、「ありとあらゆる美の描かれた一枚の春画、砂糖衣に包まれた毒を含んだ一服の清涼剤」³³、「新儒林達の恋愛攻防戦」³⁴などと評された。また、文化大革命終結後、1980年代のブルジョア自由化反対や精神汚染除去キャンペーンといった保守巻き返しの時期には、「民族解放運動に対する

真率なる関心や厳粛なる思考は見出せない」³⁵、登場するのは「“遊”学生、偽教授」ばかりで、「時代的な主要問題の表現や社会発展の規律の探求から乖離」³⁶などとも評された。『困城』が受けたこのような評価は、「恋愛は国家の前途や民族の運命と結びつかなければ、決して正統の文学として認められない」³⁷中国現代文学の宿命であったとも言える。西欧留学帰りの若者の恋愛や結婚を描いているだけでは、「国家の前途や民族の運命」を描いていることにはならず、要するに『困城』は「正統な文学」ではないという評価であろう。

しかしながら、既に見てきたように、『困城』が孕んでいる問題は単に恋愛や結婚といったことばかりではない。上記のような『困城』をめぐる言説は、中国が1980年代になっても尚「文以載道」の伝統を引きずっていることを如実に示すものではないだろうか。「民族解放運動に対する真率なる関心」だの「時代的な主要問題」だのという表現からは、錢鍾書が『困城』で諷刺的・批判的に描き出した、何も変わらぬ旧態依然の中国の姿そのものを逆に見て取ることができよう。錢鍾書が『困城』において描いた世界——自身をも投影した西欧留学帰りの若者達、そして彼らの恋愛や結婚を通して描き出した「困城」の境涯——それこそが「時代的な主要問題」に他ならない。

無論、中国においては現在でも言論・出版の本格的な自由がなく、中国共産党の規制の厳しさを併せて考えれば、『困城』の受けた批判は必ずしも評者の直接的な感得や読者の感慨を意味するものではないかもしれない。発表直後や1980年代の政治的状況に合わせて、敢えてそうした議論の俎上に載せているということが、却って中国「近代」の問題の根深さを照らし出しているとも言える。中国の経た近代化の道程は錢鍾書の『困城』によって、「近代」中国社会が内面化していたのが西欧的価値観などではなく、旧社会の因襲の重い鎖と桎梏であったことを鮮やかに逆照射されたのである。

錢鍾書は次のように書く。ショーペンハウエルの思想の影響を強く受け、彼の美学に基づいて著された王国維の『紅樓夢評論』（1904）が、清代の小説『紅樓夢』（1700年代中期）について、主人公の少年賈宝玉と少女林黛玉が結ばれなかった結末を以て「悲劇の悲劇」と評したことに関する一段である。

しかし、(王国維の論は)ショーペンハウエルの道理を尽くしておらず、その理屈も徹底的ではないようだ。もしもその道理を尽くし、理屈を徹底させるならば、木石因縁、倥傯成就、喜びはすぐ憂いに変わり、最愛の伴侶も最後には怨敵に終わるということを知るべきなのだ。遠く離れて慕い合っているけどだんだん疎遠になるものだし、ボーナスは何日もしないうちになくなってしまう。満月は霞に変わり、好事も空論に変ずる。飴を舐めているのは、蠟を囁んでいるのと同じなのである。³⁸

錢鍾書は、『紅樓夢』は賈宝玉と林黛玉が結ばれなかった点にこそ文学的美学的な真骨頂があるとし、フローベールの『ボヴァリー夫人』(1857)も同様に、上記のような境地を描いていると述べる。更に清代の文人史震林の『華陽散稿』(1700年代中期)から「境に当たりて境を厭い、境を離れて境を羨む」を引く。これら一連の錢鍾書の言説は錢鍾書の文学的立場を明らかにしてもいるが、一方でまさに「圉城」の境涯をも示してはいまいか。錢鍾書は『圉城』の外においても、このように繰り返し「圉城」を問題にした。

「西欧的恋愛」や「文明結婚」は「近代」中国のメルクマールの一端を担うものではあったが、『圉城』において描かれたそれらは、「近代」が進化論的に辿り着いた境地などではなく、結局は前近代と表裏一体の同一物であることを示した。近代であろうが、前近代であろうが、そこに生きる人間達は結局「城に囲まれている人は逃げ出し」「城の外の人の中には飛び込んで行」く、の繰り返しに過ぎない。そして又そのことは同時に、中国において人々が確かな時代的变化として捉えている「近代」というものが、一種の神話に過ぎないことを我々読者に語っているのである。

¹ 錢鍾書は、正確には1979年5月9日にカリフォルニア大学バークレー校を訪れている。当日は午後2時から東方語文学科の応接室において、午後5時から図書館において座談会が催された。詳しくは注(2)に拠る。

² 水晶「侍錢“拋書”雜記——兩晤錢鍾書先生」(『錢鍾書研究』第二輯、文化芸術出版社1990年11月)

³ 水晶前掲書

⁴ 拙稿「錢鍾書『圉城』解説1——“近代”中国のさまよえる知識人達」(『言語文化論叢』第13号 金沢大学外国語教育研究センター2009年3月)

5 楊絳「記錢鍾書与『围城』」（『楊絳文集』第二卷、散文卷・上 人民文学出版社 2004 年 5 月）

6 楊絳前掲書

7 訳者の一人である荒井健は『結婚狂詩曲（围城）・上』岩波文庫 1988 年 2 月の「あとがき」において「本書の原題名は、フランス語の“包囲された城砦”に由来するが、作者によって実にさまざまな思いのこめられたこの比喩を適確に表現する日本語訳は終に見出しえず、やむなく原題の一つの面にすぎないが、また作品の一つのテーマたることはまちがいない、男女離合の近代的形態“結婚”に焦点をしぼり、“結婚狂詩曲”なる拙い訳名に落ち着かざるをえなかった。」と述べている。

8 張競著『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店 1995 年 6 月

9 郭興文著『中国伝統婚姻風俗』陝西人民出版社 2002 年 9 月

10 張競前掲書は、恋愛について「結婚と相容れないばかりか、愛の《充足》とも相容れないことである。」というドニ・ド・ルージュモンを引用し、破局を迎える恋愛の代表として『ロミオとジュリエット』を紹介している。

11 錢基博著『現代中国文学史』文海出版社 1981 年 5 月。初版は『現代中国文学史長編』として無錫国専学生会より 1932 年 12 月に出版されている。

12 張競前掲書

13 厨川白村著『近代の恋愛観』改造社大正 11（1922）年 10 月

14 小谷野敦『〈男の恋〉の文学史』朝日選書 1997 年 12 月は、「片思い」も「恋愛」とできるとし、「恋」という感情の普遍性は平安時代の王朝文学にも充分見出し得る、故に「恋愛」という語は明治以降のものであっても、概念は既にあったと論じている。これに対しては井上俊著『死にがいの喪失』筑摩書房 1973 年 4 月から「愛と性と秩序」の中の一文を引いて本稿の立場としたい。

「自然的・本能的衝動に基礎づけられた広い意味での“異性愛”は、あらゆる時代のあらゆる社会にみいだされるであろうが、それぞれの時代、それぞれの社会は、それぞれにちがった異性愛の型をつくりだす。したがって異性愛は、その具体的な相においては、常に、歴史的・社会的に形成され社会成員によって分有され伝達され学習されるひとつの生の様式として存在している。そして、今日われわれが“恋愛”と呼びならわしているものは、一般に“ロマンチック・ラブ”とか“情熱愛”として知られている“異性愛のヨーロッパ的変種”（F・ヘンリックス）にほかならない。」

15 錢鍾書著『围城』人民文学出版社 1980 年 10 月。以後、『围城』からの引用は全てこのテキストに依拠し、拙訳による。尚、引用末尾の括弧内の数字は作品中の章を指す。また引用中に、方鴻漸に婚約者がいるとの記述があるが、

その婚約者は大分以前に亡くなっているという設定である。

16 中国で最も早く男女共学を実施したのは広州の嶺南大学で 1905 年のことであったが、嶺南大学は教会の経営する私立大学であった。中国の近代女子教育に関しては、李華興主編『民国教育史』上海教育出版社 1997 年 8 月と金以林著『近代中国大学研究』中央文献出版社 2000 年 2 月を参照した。

17 湯晏著『一代才子錢鍾書』上海人民出版社 2005 年 5 月

18 楊絳前掲書

19 水晶前掲書

20 呉学昭著『聴楊絳談往時』生活・読書・新知三聯書店 2008 年 10 月に、東呉大学時代の楊絳が「優等生であり、化粧をせず、出しゃばりでもなく、あまりガリ勉でもなかったのも、級友達から受け入れられていた」とある。

21 「中華ソヴィエト共和国婚姻条例」（1931 年 12 月 1 日公布・施行）。中国女性史研究会編『中国女性の 100 年——史料にみる歩み』青木書店 2004 年 3 月の引用に拠る。

22 顧鑑塘、顧鳴塘著『中国歴代婚姻与家庭』商務印書館 1996 年 12 月

23 陳顧遠著『中国婚姻史』岳麓書社 1998 年 9 月

24 注(21)前掲書

25 陳益民主編『老新聞——民国旧事（1928-1931）』天津人民出版社 1998 年 10 月に、『大公報』1931 年 9 月 16 日の「征婚広告（結婚相手募集）」が紹介されている。

26 楊絳前掲書

27 顧鑑塘、顧鳴塘前掲書

28 錢鍾書と楊絳の結婚式に関する記述は、湯晏前掲書および呉学昭前掲書を参考とした。

29 呉学昭前掲書

30 楊絳（1911-）は清華大学大学院在学中に短篇小説を発表。1940 年代には戯曲『称心如意』（1944）『弄真成假』（1945）などを発表し、当時相当注目された。又、建国後も回想録『幹校六記』（1981）や長編小説『洗澡』（1988）を刊行。『ドン・キホーテ』や『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』などの翻訳者としても知られる。詳しくは拙稿「楊絳『風絮』試論」（『言語文化論叢』第 6 号 金沢大学外国語教育研究センター 2002 年 3 月）、「楊絳『風絮』試論・続——すれ違う三者の物語」（『言語文化論叢』第 7 号 金沢大学外国語教育研究センター 2003 年 3 月）を参照されたい。

31 白水紀子著『中国女性の 20 世紀——近現代家父長制研究』青木書店 2001 年 4 月に詳しい。

-
- ³² 孫雄飛「錢鍾書、楊絳談『圍城』改編」（解璽璋主編『圍城內外——從小說到電視劇』世界知識出版社 1991 年 8 月）
- ³³ 張羽「從『圍城』看錢鍾書」（湯溢澤編『錢鍾書「圍城」批判』湖南大学出版社 2000 年 12 月）。初出は『同代人』第一卷第一期 1948 年 4 月。
- ³⁴ 無咎「讀『圍城』」（『小説』月刊第一卷第一期 1948 年 7 月）
- ³⁵ 楊志今「怎樣評價『圍城』?」（『新文学論叢』1984 年第三期）
- ³⁶ 徐啓華「評『圍城』」（『書林』1984 年第四期）
- ³⁷ 張競前揭書
- ³⁸ 錢鍾書著『談芸錄』中華書局 1986 年 5 月

【附記】

本稿は科学研究費補助金の交付を受けた若手研究（B）「1940 年代文学に見る“中国近代”の隘路」（課題番号 19720077）による研究成果の一部である。